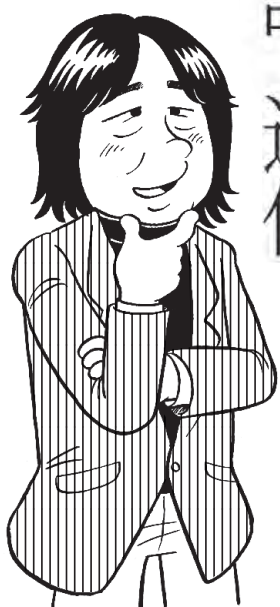


室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

# 12の対話 — 「現代」を問う

テーマ **⑧** 言葉では解決できないことがある？ — 弁証法、対話、進化



---

## 第8回 言葉では解決できないことがある？ — 弁証法、対話、進化

---

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

安藤 時間になりましたで「哲学とアートのための12の対話——現代を問う」の第8回を始めた  
と思います。もう暖房が必要な、夏が懐かしく思われる時期になってきました。今年は今日を  
合わせて後2回となります。

去年11月の末に、本講座の12回のテーマが室井さんと吉岡さんとの間でほぼ決まり、映像、  
音声、チラシなどで協力してもらってるスタッフで集まり、室井さんも出席して第1回の会合をやっ  
たんですね。その時からちょうど一年経ったことになります。ではいつものように、まず今年3月  
のプレ講座の中から、本日のテーマに関係する部分の映像を流します。



<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?feature=shared&t=2282>

プレ講座 (2023.3.12) 記録映像  
第8回 言葉では解決できないことがある？ — 弁証法、対話、進化

吉岡 この時期、10月11月はいろんな催しが重なっていると思いますが、本日もたくさん来てい  
ただいてありがとうございます。この講座は一年間続きますから、終わりの方になったら十人く  
らいになるんじゃないかとも思っていたので、とても嬉しいです。大学の講義だと、最初は何百  
人もいた教室でも、出席をとらないと秋には七、八人になったりするのですが、それとは違いま  
すね。

さて今回はタイトルに「弁証法」とか書いてあるので、ちょっと難しい話ではないかという印  
象を持たせたかもしれません。でも室井さんが言っていたようにこの講座は哲学史の授業では  
なく、哲学的なトピックを手がかりにして私たちが生きているこの世界について根本的なところ  
から考えてみようという趣旨です。

今回は私たちが毎日用いているこの言葉、言語というものについて考えてみたいと思います。  
言葉の力とはどこにあるのか。言葉では言い表せないこととは何か、あるいは言葉では言い表  
せないことを表す言葉——矛盾しているみたいですけども——について。そもそも言葉っていう  
のは、言葉で言い表せないことを言い表すために作動している、とぼくは考えているのですが、  
それはどういうことか。また、哲学は言葉、言語にどのように向き合ってきたか。

この講座は哲学入門みたいな知識を与えるものではないのですが、気になる哲学者の思想  
や概念について知りたいと思うことは悪いことではないと思います。この場合「知る」というの  
は知識を受動的に受け取るということではなくて、思想や概念について何かを語れるということ、  
この講座における言い方では「迷子になる」ことができるという意味です。ということで、言葉で  
は言い表せない、生きた世界の動的な側面を指す概念として「弁証法」をはじめ「進化」「革命」  
といった言葉をめぐって、迷子になってみようと思います。

プレ講座の映像の中では、言葉は必然的にエラーを起こす、とぼくは言いました。言葉はそれを発する人が言い表そうと意図していることとは違うことを、必然的に意味してしまうからです。言葉は私たちの自由にならないと言うことです。言葉を正しく使いましょうというのは、訂正可能なエラーは訂正しましょう、防げる誤解は防ぎましょうと言っているだけで、言葉そのものに必然的に内包されているエラーに関しては、そんな簡単な指示ではとても対処できません。

室井さんは今年に入ってだんだん身体がしんどくなってきた時、Facebookに自分の状態を書いたのですが、自分が末期癌だからと言って久しぶりに見舞いになんか来るなよと、かなりきつい言葉で言ったんです。何年も会わなかった人が記事を読んで遠方から来たりしたら、まるで自分はもう死ぬから最後に見舞いに来みたいで嫌だと。これを読んで来なかった人もいるけど、来たとしても彼は別に怒ったり追い返したりはしなかったと思いますよ。では、本当は来て欲しいのにイジワルをしてそう書いたのかというと、そんなことはないと思う。「来るな」はふつうに受け取ると禁止の命令だけど、それだけを意味しているのではないのです。

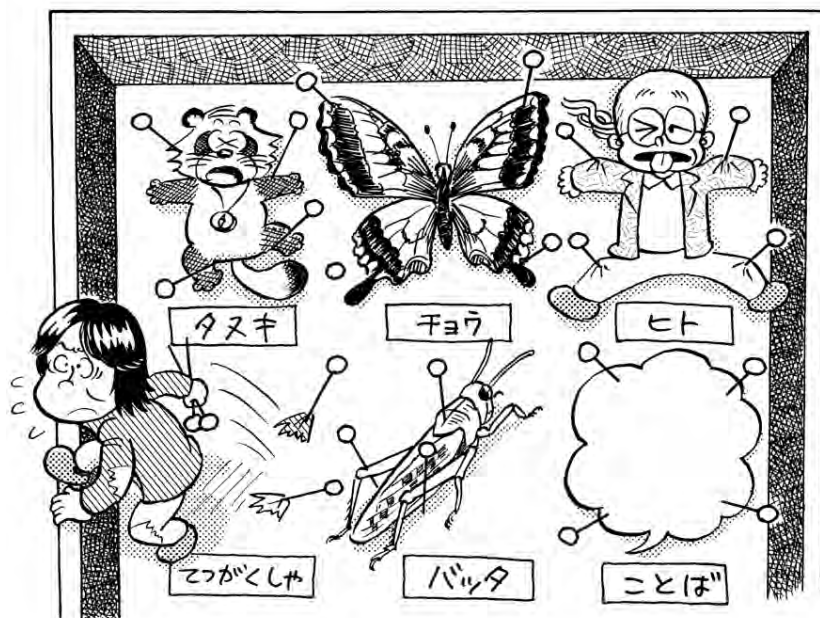
言葉は、何かを指示したり意味したりするものだと思われています。過去の人々が書き記した本の中で、そのまま読んでは分からない言葉に出会っても「〇〇とは××という意味である」と説明してもらえば、分かったような気持ちになる。けれども、哲学的思考や芸術表現において用いられる言葉の働きは、そうしたことに留まるものではありません。わざと難しく装っている言葉なら易しく解説することはできますが、それ以上易しく語ることができない事柄もある。そもそも多くの人が知らなかったこと、その存在すら知らなかった問題。その場合は言葉をそのまま受け入れるしかないのです。哲学書は難解だとよく言われますが、その理由の多くは読者が、何か自分の知っていることに置き換えて欲しいと思うからです。

哲学にも「ビッグネーム」があるでしょう。西洋哲学に限っても、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、デカルト、カント、ヘーゲル、ハイデガーとかの名前は多くの人にとって「哲学者」を代表するものではないかと思えます。日本では明治以来そうした西洋思想を受け入れてきたので、教養としてそうした思想家の著作を読むことが重要なことだと思われてきました。しかし大学周辺の古本屋などに行くと、それらの有名な哲学者たちの著作が、最初の一、二ページ、よくて数十頁ぐらいまで頑張って注釈が書き込まれたりしているのですが、その後はほぼ新品みたいな書籍がたくさんあります。なぜ途中で挫折するかというと、それは自分の生きている現実との接点が見出せない、無理して抽象的思考を追って行くしかないと感じられるからだと思えます。

ぼくも大学院生になって西洋哲学の勉強を本格的に始めた時、それらと自分自身の問題との関係をどうすればいいのだろうと考えました。論文や研究書ばかりを読んでも分からないので、狭い意味での哲学以外の知識、神話や聖典などの思い切り古いテキストから、同時代の最新の思想書などを読み漁りました。その頃室井尚さんがやっている研究会に誘われて、そこでアメリカの哲学者リチャード・ローティのことをぼくが紹介したのがきっかけとなって、共訳書として出版した最初の仕事である『哲学の脱構築——プラグマティズムの帰結』が生まれました。これは今日のテーマにも関係があるので最後の方で触れようと思えます。

さて今回もチラシの導入マンガが秀逸なんですね。谷本さんにこのマンガを描いてもらう前にぼくが導入の短いテキストを書いて出すんですが、もう8回目になるとそれを書きながら、これがどういうマンガになるのか想像してしまうんですね。「弁証法」なんてそのままではマンガにしにくいし、抽象的な内容をどのようにビジュアル化するのだろう、と。それで今回は、人間が生きた世界の何かを言葉で言い表すということ、生きた昆虫をピンで標本にするという喩えで言いました。これをそのままマンガにするのか、それともまた思いがけないヒネリをかけてくるかと想像しながら。すると、そういうワナを仕掛けた罰としてぼくはピンで止められて「ヒト」の標本にされた。タヌキやバツタと一緒に。「てつがくしゃ」の室井さんは抜け出している。面白いのはぼくの下に「ことば」という標本があつて、そこにはマンガの吹き出しがピンで止められているのです。マンガの世界では言語という抽象概念は吹き出しという形を持っているのです。まるで紹介文とマンガを通じて、ぼくと谷本さんが毎回勝負しているような感じもありますね(笑)。

さて、今日はまず言葉というものについて根本から、つまり何もないところから考えてみたいのです。一般的には言葉というのは、人間が文明を築き上げる基礎であつて、世界を記述するための重要な道具だと考えられています。文明が高度化するほど言葉も複雑になってゆく。また、子供はまだ言葉が不完全だけれども、勉強して言葉を適切に使えるようになることで、大人になってゆく。成長とは言葉の習得でもあるわけです。では言葉が適切であるとはどういうことかという、言葉が世界そのものを正確に反映しているということです。「正しい」言葉とは、実在する世界に対応している言葉のことです。けれども、もしも言葉の目的がそれしかないとなると、この「正しさ」が究極的に向かっているのは、世界そのもののシミュレーション、実在する世界自体と完全に対応している言語ということになります。もしもそんな言語に到達できたら、世界そのものはある意味でもう不要になるとも考えられますね。



イラスト／谷本 研

ここまで極端に考えるとそれはそれでまた面白いんですけども、私たちの常識の中には、言葉とはそんなものではないという直観があります。私たちは一方では正しい言葉が世界を反映すると考えながら、他方ではどんなに正しくても言葉によっては言い表せない経験があるとも考えているのです。だから場合によっては、言葉なんてしょせん無力なものだということも言いたがるんです。身体的には言葉が不完全なものだということを知っているんです。どういう局面でそういうことを言うかという、それこそ「言語を絶する」ような経験をしたときです。

「言語道断」と言うじゃないですか。「言語道断」というのはもともと、言葉では言い表せない仏教的な真理というようなことなんです。現在ではよく「けしからん」「もつてのほか」というような意味で使いますが、本来の意味は、言語を超えているということです。たとえば心の底から動かされた芸術的感動とか、人生における重大な局面に突然遭遇して言葉が出ない、といったことですね。そうした時に、それを第三者が横から見て「ああ、それはこういうことですよ」みたいに説明されると「軽々しく言うな！」って腹が立ったりしますよね。そういう時には言葉は薄っぺらな、ニセモノのように感じられるでしょう。

アーティストの中には、自分の作品が批評家や解説者によって言葉で説明されることを嫌がる人、嫌がらないまでも、言葉による説明では何にも伝わらないと思っている人もいます。もちろん、作品を言葉に置き換えることはできないと言うのはその通りなのですが、だから言葉はしょせん無力なものだというふうに一般化するのは間違いですね。批評や解説の中には、たんに優れた語りとダメな語りがあるだけです。優れた語りとは何か新しい認識を開こうと試みていて、それを読むと作品をもっと注意深く見たり考えたりしたいと読者が促されるような作文のことです。ダメな語りというのは、パターンに従ってもっともらしいことを言っているだけで、それを読むだけで作品が（悪い意味で）分かったという気になるような作文のことです。しかし残念ながらそういう作文には商業的なニーズがあるので、こちらの方がはるかに多いです。

何か分かった気になる、言葉によって対象がもう不要に感じられるというのは、まさに言葉が現実にとって代わるということです。しかし、言葉は現実にとって代わりうるものではありません。言葉は世界の写像ではないんです。一見、写像に見えるんですけどね。これがトリッキーなところですよ。

と同時に、重要なことは言葉では言い表せない、言葉はしょせん無力だと言うとき、私たちは逆にある意味で言葉を過信しているのではないかと、言葉をディスるのはその心性の裏返しでもあるのではないかと、というふうにも感じます。この言葉では言い尽くせないというのは、どこかに究極の真理を言い尽くせる言葉があると言っているようにも聞こえる。自分が今考えていることや感じていることをありのままに表現できる理想の言葉があるはずだと。そういうロマンティックな幻想が暗黙のうちにあると思います。その意味では、言葉を軽視する人は自分が思っている以上に、実は言葉に深くとらわれているとも言えるわけです。

ではどんな言葉がこの世界をもっともありのままに表象できるのか？ ある時代までは、英語は論理的で日本語は不合理な言語だなんていう考え方がありました。今でも信じている人がいるかもしれません。ぼくは今日本語で喋っていますけれども、世界には様々な言葉があつて、歴史上もはや使われなくなった言葉も含め、非常にたくさんあるわけですよ。それらの間に、何か優劣はあるのでしょうか。

子供が生まれると、普通はその社会の中で話されている言葉を習得して成長していきます。けれども、もしも生まれた子に何も教えず、人と接することもさせないで成長したら、その子供はどんな世界観を持つようになるのだろうか。もちろん、生きていくのに必要な食べ物とかは与えるわけですけど、もしそんなことを本当にやったら犯罪的な虐待ですけど、そうしたらどんな子が育

つかという空想はできるのです。

子供が周囲から言葉を習得しないことによって、その子は本来の言葉を話し始めるのではないか。本来の言葉というのは神様の言葉、ユダヤ教的にはヘブライ語で、つまりバベルの塔の混乱以前の、人類共通の言葉です。ご存知のようにユダヤ教の『聖書』（つまりキリスト教の『旧約聖書』）では、昔は人間はみんな同じ言葉話して、コミュニケーションの問題というのがなかった。傲慢になった人間は天に届くような塔を建設するのですが、神様は怒って人間の言葉を混乱させ、互いに言葉が通じないようにした。コミュニケーションができないと建設事業もできませんから、それでバベルの塔というプロジェクトは頓挫したわけですが、このことが世界に様々な言語が生まれた理由だとされています。

だとすると、この混乱をリセットしたらどうなるかという空想が生まれる。歴史は巻き戻せないけど、一人の人間で実験することはできるのではないか。つまり生まれた子供にバベルの混乱後の言葉を教えないで育てれば、その子は何も教えなくても本来の言葉を喋り出すのではないかと。もちろんありえないことですが、面白い空想だと思います。言葉の問題だけでなく、文明の影響を受けずに育ったらどんな人間ができるか。ジャンジャック・ルソーのように文明を悪だと考える啓蒙主義時代の過激な思想もその背景にあります。そして実際、そういう人間が発見されたりしたんですね。動物に育てられた野生児もそうですが、16歳になるまで牢に閉じ込められていたカスパー・ハウザーも有名です。

カスパー・ハウザーというのは1928年にニュルンベルクで発見された青年です。言葉も話せず、普通の人にとって当たり前のことを何も知らない。しかし頭がおかしいわけではなく、後には言葉を習得して話すことができるようになります。推測されるところによると、彼は何らかの理由で生まれた時から牢の中で鎖に繋がれて、教育は一切与えられず、食べ物や必要な身の回りの世話だけをされて育ったのではないかと想像されました。カスパー・ハウザーを扱った小説や戯曲が作られ研究書も書かれてきましたが、1975年にはヴェルナー・ヘルツォークというドイツの映画監督が『カスパー・ハウザーの謎』という作品を制作しています。

その中で神学者がカスパーに、お前は牢の中でこの世界には偉大な方が存在するのを感じなかったか?と訊きます。つまり、何も教えなくても人間の精神には神の観念が宿っていることを証明したいのだと思います。でも、カスパーには神って何? という感じで意味が分からない。さらに面白いのは、カスパーにはほとんど欲望というものが無い。言葉や知識を習得した後でも、お金やモノが欲しいとも思わないし、身体は正常なのに性欲も発現しない。もしもそれが文明の影響を受けない人間の本来の姿だとしたらどうか、ということをお考えください。

それはともかく、文明の影響を除去したら（そんなことができるのかという疑問はさておいて）人間はそもそもどういう存在として現れるのか。これは面白い問いかけだと思います。文明の基礎は言語ですから、言語を取り除いたら（これも同様に、ありえない仮定のようにも思えますが）私たちの世界認識はどうなるのか、という問いに言い換えることができます。哲学の世界でも、言葉に対する哲学者たちの態度というのはいろいろですね。言葉の中にこそ世界の秘密があるという考え方もあります。これは現代ではわりと支配的な考え方です。現代の哲学は一般に、言葉へのこだわりがすごく強いんですね。

では現代より前はどうかだったかという、言葉よりも観念ですね。言葉とは目に見える記号で、観念とは心の中の表象です。観念は英語ではアイデアで、その語源はギリシア語のアイデアですが、プラトンが言うアイデアというのは、綴りは似ていますが近代的な英語の「アイデア」という意味とは全然違います。アイデアとはこの世界の時間・空間的な制約から自由な、真の実在です。それとは違って、近代哲学のアイデア、観念とは、心の中に生じる表象です。それは、この世界の真

の实在を相手にすると宗教的信念や迷信と区別しにくいから、哲学はもうちょっとマトモな、心の中の表象を扱った方が学問的なのではないか、ということではないかと思います。さらには、観念も客観的にこれだと示すことは難しいので、むしろ観念を言い表す記号である言語に集中した方がいいのではないか、ということになります。

現代の哲学者は昔の哲学者のように世界そのものを相手にするタフな人は少なくなりました。専門化した哲学者ほど、世界そのものなんて知りようがないんだから、それは括弧に入れといて、世界について我々が抱く観念、さらには認識を媒介をしている道具である言葉の方が重要だと考えます。言語の構造を精密に分析していったら、それが媒介している観念や世界の秘密もわかるんじゃないか。まあそういうことで言語に注目するということです。この場合には言葉は非常に大事な、哲学の中心テーマに昇格されるわけです。

けれども哲学の歴史の中には、言葉なんて所詮ロクなものではないと考えていた哲学者も少なからずいるんですね。西洋哲学だと代表格は何といってもプラトンです。プラトンというのはあんなにたくさん本を書いたのに、言葉を信用しないなんて、おかしいような気がするかもしれませんが、そうなんです。もともと、古代ギリシアの哲学者は他にもたくさん本を書いていたらしいですけどね。プラトンやアリストテレスは残ってるから今も読めますが、他の多くの人の著作は散逸してなくなってしまったんです。それはともかく、プラトンは言葉の力に関して否定的です。伝記によると彼は若い時政治家になろうとしたり、レスリングの選手だったという説もありますね。それが本当だとすると、プラトンは最初は権力闘争とか肉体の闘争の世界から出発したという風にも想像できます。いわゆる頭でっかちの哲学者ではないですね。そういうナマのリアリティーに接していたので、言葉なんてたいしたものではないと考えたすれば、まあ分からなくもないでしょう。

しかもプラトンが疑ったのは言葉一般ではなく、書かれた言葉、つまり文字言語です。プラトンの『パイドロス』という対話篇の作品の中に、文字言語は「ファルマコン」だという話が出てくる。ファルマコンというのは、薬のように役立つと同時に、毒のように害をなすものを指すギリシア語です。さらに「犠牲」という意味もあるのですが、なぜそういう意味もあるのかはまた今度機会があれば話します。文字言語がなぜファルマコンかということ、一方にはそれは記憶を増大させる、つまり書いておけば忘れても思い出せるし、一度考えたことがいつでも参照できるということがあります。文字言語と言っているけど、これはつまり外部記憶という問題ですね。

文字言語というのは最初の外部記憶なんですよ。確かに便利だが両儀的、つまり良し悪しがある。忘れても書かれたものを見れば思い出せる代わりに、私たちは記憶する能力を失ってしまいます。記録の可能性は同時に記憶の喪失になるということですね。どういうことかということ、記録されるのは単なる記号としての文字だから、その言葉がいかに話されたか、どういう意味で話されたか、そういう情報が全部落ちてしまう。後世の人は、文字だけを見てその人が何を言ったかという事実は分かるけれども、なぜ言ったか、どういう意味で言ったかという意味は、記録によって失われてしまいます。

だからプラトンは本を書く時に対話、ダイアローグの形式で書きました。現代の哲学者は本を書く時、ほとんどの人はモノローグで書きます。対話ではなくて独白ですね。「私はこう考える」という形式の発話です。哲学に限らず、現代ではそういう文章を書かないと、認めてもらえないですね。学生が大学でレポート書いたり、論文を書いたりするときに「私はこう考える」という形式で書くから論文として成立するのです。もし論文が、「私はこう思うと言ったら、相手はこう答えた」みたいな対話形式で書かれていたら、ふざけるな! って言われるよね。

それに対して、プラトンのテキストは「対話篇」と呼ばれていて、ダイアローグです。これは現

代の人が読んだら、演劇みたいな形で読めると思います。ダイアログというのは、ダイア（二つの）+ロゴス（言葉）だから、複数の言葉ということなのですが、「弁証法」と訳す時もあるんです。しかし「弁証法」という言葉はその後、ヘーゲル哲学とマルクス主義を通して特殊な意味がかぶさってしまいましたので、日本語として難しい印象がありますね。

モノログとダイアログ、一人語りと対話はそもそも何が違うかという点、モノログは自分で全てをコントロールできますが、ダイアログは次に相手が何を言うか分からないので予測不可能だということです。つまり、ダイアログは常に変化する世界に対応した言語形式であるということです。言語は、もしもそれを世界を記述したり反映したりする道具だと考えると、対話のように常に変化してゆく状況を捉えるのは、いちばん不得意ということになってしまいます。言葉は変化が不得意なのに、変化する世界を捉える言葉というのはあるのでしょうか。

世界の変化を表象するための言葉はたくさんあります。例えば「進化」とか、それから「革命」といった言葉がそうです。それらは単に具体的な事物を指示する言葉とは違って、事物を越えた世界のリアリティを指し示しているように聞こえるので、魅力的なのですね。だから、いろんなところで使われます。メッセージに力を付けたいというようなときに、たとえばコマーシャルで新製品を広告するためにコピーライターはどんな言葉を入れるか迷った時、「進化」「革命」はむちゃくちゃ使いますよ。「進化した」何々とか、何かにおける「革命」とか、そういうふうに使います。政治的な言葉でもよく使用されますね。

たとえば一昔前は「IT革命」とかありましたが、今は誰も言わなくなった。何とか「革命」というようなタイトルを付けると、それだけで何かそこに意味が生じて、世界が根本的に変化するように見えるので、結構インパクトがある。そういう政策で人を誘導することもできるし、そういう本を書いたら売れる、そうした力のある言葉なんですけど、こういう言葉っていうのは元々の意味とはほとんど関係がないというか、意味がかなりねじ曲げられている、ということを知るのも重要です。

日本語で「進化」と「革命」っていうと、まるで全然違う言葉に聞こえませんか？ところが、これらは英語で言うと「Evolution」と「Revolution」なのでとてもよく似ているんですよ。「R」が付いているかないかだけなんです。これって、いったいどうなっているのか。「進化」っていうのはもちろん、チャールズ・ダーウィン以降に広がった言葉なんですけど、ダーウィン自身は「進化」、エボリューションという言葉はほとんど使ってません。

ダーウィンの『種の起源』の中には、「Evolution」という単語は一度も出てきません。ただ「evolved」という、「evolve」という動詞の過去分詞が一回だけ出てきます。ダーウィンは、自然界には変異があり、それが環境によって選択され、生物の変化が起こると言ったのです。何が言いたいかという点、ダーウィンは「進化、進化」なんて全然言ってなかったのに、後世の人たちがダーウィンを「進化論」という形でまとめてしまったということです。ダーウィンがなぜ「進化」、エボリューションということと言わなかったかという点、そもそも「evolve」という英語は、豊んであるものを広げる、展開するというような意味を持つ言葉なんです。それは、キリスト教的な自然観の中で、親から子供が生まれ、その子供からまた子供が生まれというようなそういう生物の世代、ジェネレーションが展開していくのを、神様が創造の日に全て仕込んでおいたという考え方に繋がるからです。つまり、全人類はアダムの中に仕込まれていたということです。ダーウィンはそんなのと誤解されるのが嫌だから「エボリューション」という語は使いたくなかったのだと想像します。

ダーウィンの言う進化というのは、変異と選択、バリエーションとセレクション、これに尽きると思うのです。色んな変異ができて、その中からある環境によって適応した生物が残っていく。



だから、この進化という考え方には、それによってより高度に向上してゆくとか、より優れた存在に向かって進歩するとか、そういう意味はまったく含まれてないんです。今存在している生物は、たまたま適応したから残っているだけで、優れたから残っているのではないのです。地球上では現在たまたま人類は幅を利かせていますが、それは人類が最も高度な生物だからではないし、他の生物がみんな人類を目指しているわけでもない。

進化は進歩とは何の関係もなかったし、価値を含んだ言葉でもなかったのに、より高度で価値のあるものによって変わっていくというニュアンスで、この進化 (Evolution) という言葉が使われるようになったんです。これはダーウィン自身の意図ではなくて、ダーウィンを利用した一種の政治的運動、つまりダーウィニズム (ダーウィン主義) の思想によって、人類の進歩とか、その進歩の最先端としての西洋民族の優越性とか、そういうことを合理化する為に使われたんですね。

現在でもこれが残っているのです。「進化」という日本語の言葉の中にも、いまだにダーウィニズムがあります。近代の日本語も、19世紀の欧米社会の支配的な思想を受け入れたから、進歩主義、科学万能、植民地主義、帝国主義、そうしたものを背景にした言葉として、この「進化」という言葉が広がったのです。だから強い力を持っているのですね。

「進化」はマジックワードですが、「革命」もそうなんです。「革命」という語の元になる「REVOLUTION」っていう英語を聞いた時、何かおかしいなって感じませんか?だって、「リボルブ (revolve)」リボルブっていう言葉は、回転するという意味じゃないですか。「リボルバー」って、回転式拳銃のことじゃないですか。銃弾を一個一個込めて打つのは大変だから、6つぐらいの回転機構の中に弾を入れて連発できるやつ。ロシアンルーレットで使う拳銃ですね。でも「革命」というのは回転ではなくて、現行の体制を全部壊して画期的で全く新しいものが出来上がるという意味で理解されているのではないですか。

それまでまったく存在しなかった新しい政治体制ができて、しかもそれは不可逆的な変化、つまり一回できたらもう元には戻らない、それが「革命」ということでしょう。だとしたら「レボリューション」、つまり回転という言葉とは最もふさわしくない意味ですよ。いったいなんでこんなことになったのか。これは特定の歴史的経緯によるものだと思います。

大雑把な言い方だけど、この原因はフランス革命ですね。あの1789年の事件を「革命」と呼んだからです。あれをね。ただの暴力的政変なのに。確かに「フランス革命」は今私たちが理解する意味での「革命」ですよ。だって王様のギロチンで王様の首を刎ねたんだからね。もう元に戻らない、不可逆的な変化です。でも実際には王政復古して戻りましたけどね。

ここから「革命」という言葉が、フランスの市民革命をその後さらに徹底するものとしての「社会主義革命」や「共産主義革命」を正当化するキーワードとして広がっていきました。「革命」という言葉が、世界の不可逆的で必然的な変化を表す特別な意味を持ち始めたんです。フランス革命以前には「レボリューション」という言葉はどちらかというと、昔の良かった状態を取り戻すというような意味があったはずですよ。

「革命」と深い関係を持つ概念として「弁証法」があります。これも元々は「対話」というような意味だったけど、ヘーゲルがそれに別な意味を与えました。ヘーゲルも哲学者の代表の一人ですが、その著作は何か知識を得ようとして普通の本として読んでも、何を言ってるのか全然分からないと思います。でも何かすごいことを言ってる感じがあるのですよ。ぼくが大学院時代に研究していたアドルノという20世紀の哲学者はヘーゲルの著作について、火のような熱い酒に満たされているが、どこに飲み口があるのか分からない樽だというようなことを言っていました。

何を言ってるかは分からないのですが、ヘーゲルは面白いんです。深淵な真理を求めて読むよりも、まず面白くなって読むのが正解だと思います。こんなに熱く語って、この人はそもそも何をやっ

てるのかってというような気持ちで読むといいと思います。分からないのは自分が頭悪いからだとも考える必要はまったくないですね。ツッコミながら読むといい。一ページ読むだけでももう何かこうジェットコースターに乗ってるみたいな経験ですからね。ある程度その面白さを知ってる人と一緒にツッコミながら読むのがいいと思います。

前に非常勤で教えていたある大学の講義でヘーゲルの話をした後、学生が長い感想文を書いてくれたのですが、彼女が習っている先生はヘーゲルの専門家なのだそうです。だからその授業をずっと受けてきたんですが、先生はものすごく苦しそうに顔を顰めながらヘーゲル哲学について語っていたけど、吉岡先生は笑いながらこんな面白いものはないというような態度でヘーゲル哲学について喋るから、そのことにいちばんショックを受けました、と(笑)。

哲学は難解で苦しみながら我慢して読まないといけないのだ、というのは、日本が明治以降、大学でヨーロッパ思想を教え始めた時に、特にドイツ哲学に関してはそういうイメージが定着してしまったのでしょうかね。何の根拠もない偏見で、まずそういう偏見を取り除くということが大事だと思います。

最後にリチャード・ローティの『哲学の脱構築(原題は「プラグマティズムの帰結」)』という本のことを話しますが、これは関連する写真があります。これは僕がまだ大学院の博士課程の時に、室井さんと一緒に仕事をしはじめた頃のもので、この本を5人の仲間で翻訳してお茶の水書房という出版社から出した頃のもので、その頃、この5人を中心に研究会をやっていたんですよ。「人間と言語を考える会」だったかな、特に決まったテーマがあるわけではなくて、各自が見つけてきた面白い本やトピックについて順番に発表するんです。

それで僕がある時、リチャード・ローティというアメリカの哲学者が書いた『哲学と自然の鏡』という本がとても話題になっていて、いろんなところで論争を引き起こしているということを発表しました。僕は自分は18世紀ドイツ哲学を主に研究していたのですが、その本にはドイツやフランスつまりヨーロッパ大陸の思想と、イギリスやアメリカの英語圏の哲学とが、異なった文化として広い視野から捉えられていて、まるで思想の文化人類学みたいな感じがしたのです。この「広い視野」というのがローティの言うプラグマティズムで、日本もヨーロッパや英米の思想を外から輸入したという意味では、ある程度共通点があると思いました。

哲学を「文化」として相対的に理解するというのは、それまで思いつかなかった視点でした。日本人にとって西洋哲学というのは、外部から入ってくるものだから、たとえばフランス哲学をやっている人はフランス人と自己同一化しようとするんですね。でもフランス哲学をいくら勉強してもフランス人になれるわけではないから、フランス人と同一化しようとしている自分と、そうなれない日本人の自分とに分裂する結果になります。

さらにこの本は、西洋哲学の根底的な動機が「実在との対応」であると主張します。実在、つまりありのままの世界に対応するような「観念」に到達することが、真理に到達するということの意味していたのです。しかし20世紀に入ると「観念」という曖昧なものよりも、より具体的に操作できる記号、シンボル、言語といったものの方が重要とされ、実在と対応する言語に到達することが哲学的探究の目標になりました。観念から言語へ、というこの転換を「言語論的転回」と呼んだりします。

そういうことを発表したら、みんなが面白いと感心してくれ、その本をみんなで翻訳しようじゃないかということになった。でも問い合わせしてみるとすでに別の出版社に翻訳権が取られていたんです。それで、『哲学と自然の鏡』の後に巻き起こった反響に対してローティが応答した「プラグマティズムの帰結」っていう論文集を翻訳することにしました。それが日本語では『哲学の脱構築』というタイトルで出たわけです。

この写真は、たぶん翻訳原稿の最終チェックを終えて、一緒にすき焼きか何かを食べた後に撮った記念写真ですね。場所は当時ぼくが仕事場にしていた島本浣さんという方の自宅です。島本さんは京大の美学研究室の先輩で、京都精華大学の学長もされた方ですが、当時は家族でフランスに滞在していて、その間ぼくが家を管理しがてら仕事場に使用してもらっていたのです。

室井さんと僕の他に、共訳者である加藤哲弘さん、浜日出夫さん、<sup>ちよう</sup>廳茂さんが写っています。1984年頃ですね。余談ですが、横にあるテレビモニターに映っているのは、大林宣彦監督の『時をかける少女』という角川映画のラストシーンです。1980年代というのは、ホームビデオが急速に普及していった時期でもあり、みんなレンタルビデオで好きな映画を何度も見るできるようになりました。この写真は偶然ではなく、意図的にこのシーンが写り込むように、室井さんがセッティングしたような記憶があります。

それはともかく、そうやって5人で訳した『哲学の脱構築』の訳者解説をぼくが代表して書いたのですが、その内容が今日のテーマである言葉の限界という問題に密接に関係しています。先ほど言ったように、西洋哲学は実在の探究に始まり、近代においては実在を正しく反映する「観念」の探究に向かいました。それが「言語論的展開」によって、「観念」から「言語」に関心が移り、言語を分析しそれを正しく使用することが重要になりました。「正しく」というのは言語が実在を忠実に反映するということです。

この背景には、19世紀から20世紀にかけて急速に拡大してきた自然科学、特に物理学のような厳密科学の発達があります。自然界を数理的にシンボル化できる厳密科学の有効性に、哲学のような人文学が対抗するためには、世界を描写する記号としての言語の性質を厳密に分析してゆくことが重要だと考えられたのです。そしてまさにそのことによって、言語の本質的な不完全性が露わになりました。つまり、世界を厳密に記述しようとすればするほど、同語反復や自己矛盾、パラドックスが発生し、言語が世界に完全に対応するのが不可能であることが示されたのです。ウイットゲンシュタインの哲学はそのことの最も明白な表れです。

ローティは、観念であれ言語であれ、実在する世界との対応を求めること自体に問題があったと考えました。だから、そうした欲求（「認識論的欲求」）を捨てて、哲学を特定の文化的伝統と不可分な物語のようなものと考えたほうがいと主張しました。つまり哲学は「自然の鏡」であるというセルフイメージを捨てるべきであるということです。

僕はこの主張に強く共感すると同時に、それでは哲学と文学との境界がなくなってしまうのではないかとも感じました。別に哲学が文学よりも「エライ」と主張したいわけではないが、哲学はたとえ文学の一種だとしても、やはり特殊なジャンルの文学なのではないか。その特殊性は、まさに哲学が単なる物語以上の欲求、つまり——たとえ原理的に不可能であっても——自然と認識との対応を求める欲求にあるのではないかということです。そこから、言語が世界を描写しようとして必然的に破綻する「エラー」の中に、ある積極的な意味を見出すようになったわけです。

---

## 参加者との対話

---

安藤 では後半の発言タイムに移りたいと思います。ちょっと今日は時間が短いですが、どなたか？

発言者A 今回のお話と関連して神秘的なものについて、少しお伺いしたいなと思います。というのは、吉岡先生が書かれた『思想の現在形』の中に今回の話題と結構深くかかわるものとして「神秘的なもの」というトピックが扱われていたことを、さっき自分で個人的にとっているノートを検索していて思い出したんです。吉岡先生はその本の中で、神秘的なものというのが近代的な思考にとって影のように常に存在していて、それは言語をはじめとしたシンボルからは取りこぼされてしまうような経験を常に表わしている、という風なことを書かれていました。すごく興味深いなと思ったのが「神秘的なものとの邂逅は、認識や言語の本質について深く考えるという経験の中で、必ず何らかの形で出会うものである」とした上で、「神秘主義とは人間の言語の無力さや認識の限界性をもたらすトラウマを心理的に保証するようなプログラムなのである」というふうに書かれていて、そして最後のところで「その近代的な人間観が終わりを迎え、それが新たに更新されていくとしたら、その中で神秘主義は消滅はしないまでも、その機能のある部分がより合理的な思考に引き継がれることになるのではないだろうか」というふうに書かれているんですね。この近代的なものにつきまとう影としての「神秘的なもの」。そしてそれが更新されていく中で、より合理的なものとして現れてくる、その後者の「神秘的なもの」というのは、どういう風にイメージすれば良いでしょうか。

吉岡 はい、ありがとうございます。いやー、こういう読者は怖いんですね(笑)。

以前河合隼雄さんと一緒にお話した時に、彼の講演の後で、やはり真っ先に質問した人が彼の全ての講演を聞いていてね、「先生は2年前のナントカ大学でのご講演の中でこういうことをおっしゃいましたけれども、これはどういうことでしょう」とみたいな質問をした。やはりこういう聴衆は怖いと言っていました。本人は全く忘れてるという感じだったので(笑)。

いや、でも今の箇所はぼくは忘れてはなくて、鋭い指摘だと思います。合理的思考と神秘的なものは、一見対立すると考えられがちですが、本当は単純に対立しているのではないと思います。今日の言語の話と同じ構造を持っていると思うんですね。つまり、合理性が極まるところに神秘も極まるんです。

分かりやすい例で言えば19世紀以降、産業革命の影響を受けて、人間の一般の人たちの社会環境、日常生活の環境が非常に合理化され、神秘が追い払われていって、「科学的思考をするのが進んだ人間で、宗教とか迷信に囚われているのは遅れているんだ」とみたいな価値観がはつきりしてきた。この200年ぐらいのことです。しかしその中で極端な神秘思想も生まれる。だから、合理性や合理的科学みたいなものが進んでいくと、同時に神秘思想も広がっていくと思います。

科学の分野の中でも厳密科学、つまり数学や物理科学は、厳密に思考できるがゆえにその分だけ、神秘的なものを呼び込んでしまう素地も持っていると思います。無意識的なものとして。心霊科学、オカルトみたいなものにある時ずっと行ってしまいう人って、普段は厳密に合理的な思考をしている物理学系の人が多いような印象がある。生物学も、現代の生物学はかなり厳密科学になってしまっているのも同じかもしれません。では将来どうなるかということですが、僕

は今のよう、人間が経験する神秘的な領域と、合理的に記述可能な言語や数理的なシンボルによって記述可能な世界とが、ここまで分離している状況というのは不安定で危険だと思っているんです。

これは早晚絶対に揺り戻しが来る。もう少し昔のような、合理と非合理が入り込んだゆるい状態を回復していかざるを得ないと思っています。昨日の晩、なぜか気になってフロイト全集を引っ張り出して色々読んでたんですけども、20世紀の初頭でしょう、フロイトがいろいろ書いていたのは。精神分析自体、今は精神医学の中でも隅っこに追いやられてリスペクトされないんですけども、フロイトたちが20世紀の初頭に扱っていた事例を見てみると、ちょっと信じられないような神経症とかの症状が出てくるんですよ。ほとんど神秘体験スレスレみたいなのがいっぱい出てくる。何故かなと思ったんですけども、大きな要因の一つは第一次世界大戦だと思うんです。

第一次世界大戦で、それまでの戦争ではなかったような大規模な破壊の経験、極限状況みたいなものを経験して帰ってくる人が多くいたわけです。精神分析はそういう人たちを診察したりする中で生まれてくる知識ですが、人間がそういう極限状態の中で経験することというのは、そんなに合理的な言語だけでは記述できないんですよ。そういうものに対処しようとした科学だと思うんですね、精神分析というのは。

それに今を比べてみると、今はそういうのはないんです。極限状態から知見を得るのではなくて、平穏な日常生活が正常性のモデルになっている。だから精神的な障害を扱っていても、大体薬で解決しようとする訳です、しかも、その薬が確かにその効果だけに注目すると効くんですよ。だから非常に合理的な世界になっていると言えるけれども、実はこういう世界が成り立っているのは、ある意味現在が多かれ少なかれ平穏というか、日常生活が安定しているからだと思います。世界の別な場所では戦争が起こっていることを知っているのだけど、現在の日本ではまだ多くの人にとってその最低限の安定した日常があると感じられている。そういう日常の中では人間は神秘体験をしないし、神秘的なものについて真面目に考えないから、やはり合理と神秘との間の分離が温存されてしまう。温存されるというのは不健康なことだと思うんです。

映像の中で室井さんが言っていたように、「言語がエラーを起こすことが大事だ」と僕は常に思っているんですが、言語が必然的にエラー起こすまでになかなか至らないんですよ、生活が安定していると。だから、合理的思考の中に引き継がれるという言い方を昔したかもしれないけれども、たぶん言いたかったことは、神秘的なものと合理的思考とがもう少し接近する方がいいという感じだと思います。世界にはワケのわからないものもあつた方がいい。そういう直観を取り戻す方がいいし、いずれそうなると思っている。

日常が壊れるといつても、あんまり天変地異とか戦争とか悲惨な状況でない方がいいなとは思いますが、どうでしょうかね。最低限の安全性がある状態で神秘が日常に回帰してくるのが理想だと思うけれど。今までの歴史を見ると、結構そういう振幅が繰り返されていて、今はかなり振り子が一方に振れすぎて不安定な時期だなと感じます。30年近く前、僕が甲南大学に勤めていた1995年に地下鉄サリン事件が起こったんですが、あのあたりから今に続く不安定さが増してきている感じがする。

発言者B すいません。一番最初の導入直後ぐらいに話された「言語に限界があつて、そのシステムが必然的にエラーを起こす、それが本質的である」っておっしゃった際に「エラーが起こった時、そのエラーを積極的に肯定する。で、それはなぜかという、それによって前に進むからだ」という言い方をされたと思うんですけど、このエラーを肯定して進むっていう表現を以前にも

聞いたことはあったんですけど、それは恐らく「進歩」とかっていう話と違う意味で使っていると思うんです。でも前に進むとか、後でダーウィンのバリエーションとか変異とかっていう色々な言葉が出てきたと思うんですけど、そのニュアンスについて、もうちょっと具体的に教えてもらえませんか？

吉岡 僕は自然の世界と人間の文化とか文明の世界の間には明確な境界がないと思っているんです。連続していると思っている。だから、言語の進歩も生物界の進化と同じような仕組みを根底には持っていると思っているんです。

進化というのも単純な進歩じゃなくて、さまざまな個体変異、バリエーションが生まれて、それが自然つまり環境によって選択されるということだけけれども、その環境も同時に変化しているんですね。環境と個体が常に同時に変化するというのが生態学的な考え方の基本です。ダーウィニズムが何故だめかという、ダーウィニズムは環境を固定的に考えて、そこから「適者生存」というようなことを言うからです。環境が常に変化しているということは、何が「適者」なのかわからないということなんです。

今でも人間同士はもちろん企業社会における競争とか国家間の競争が「適者生存」のようなイメージで理解されますね。それがあのように見えるのは、勝者が自分に都合のいいように環境を作り出すという面があるからです。でもその支配は完全ではなくエラーも起こるのです。環境を完全に制御することはできないから。そのエラーの発生に希望があります。

プレーヤーとその環境とが同時に変化するという事は、指しているうちに盤面自体が変わったりルールが変化したりするゲームみたいなもので、長い目で見るとどういふプレーヤーが強いのかは分からない。確かに短期的にはプレーヤーか環境のどちらかを固定して予測することができるかもしれないけど、長期的には不可能だと思います。言語のエラーというのもそうした変異なんですよ。正しく言葉を使おうと思ってもどうしても矛盾したことを言ってしまうたり。

芸術や文学が重要なのは、そこでの言語の用い方、つまり詩的言語というのは、そうしたエラーや変異の働きをポジティブに活用する可能性に開かれているからです。詩的言語というのは、理屈の部分だけ取り出したらおかしいんです。違うロジックで動いているから、普通の日常生活における合理的な言葉遣いからしたら、エラーとしか見えないですよ。何が言いたいのか分からない。的外れなもののように思えるけど、エラーをいっぱい出していると、その中で突然ヒットするエラーってあるんですね。

つまり環境ごとに変化させて、世界全体を違うステージに上げるということがある。上げるって今言ってしまったけれども進歩とかより高度になるとかいうことじゃなくて、要するにそこから新しいゲームが始まるみたいなイメージかな。

発言者B 分かります。環境も生物も同時に変化しているとか、相互関係でっていうのはわりと最近認められ始めているような……、人類学とか別の領域とかでも。もう一つは詩の言語の話だと、結構詩がどう考えられているか時代によって違うと思うんです。ギリシャとか、それこそプラトンが実践してたりとか、アリストテレスが言語は違うんだけど、詩っていうものを同様に尊重してたり、寛容性を持っていたっていうことも結構つながるのかなと。

吉岡 うん、詩的言語って今言っているのは言語の詩的な用い方という広い意味で、必ずしも世界文学全集に載っている詩人とかその作品を指しているだけじゃないですよ。我々が日常会話の中で使っている言葉でも、凶らずも変なことになってしまう時ってあるでしょう。そういうのも

含めて詩的言語と呼んでいるのです。別にそれで文学賞を取れるとか、そういう価値付けじゃない。正常性からの逸脱です。常識的な言語使用から逸脱する力ですね。もちろん単なる間違いで終わることもいっぱいあるんです。生物の世界だって、突然変異というのは大体はエラーなんです。適応できないで一代限りで終わっちゃう。でも、時々ヒットするんですよね。そういうのとよく似ているんじゃないかな、詩的言語のあり方って。そして言語が詩的な逸脱ができることが、僕は言語の持っている根本的なパワーだと思っているんですよ。

もっとも逸脱はいつも起こるわけじゃない。逸脱ばかりしていると生きていけない。基本的には安定している中で、時々逸脱をする。小さな逸脱もあれば、時々とんでもないのも来る。詩的な逸脱は言葉の持っている一番古い機能だと思います。僕は文字言語を発明するはるか以前、何万年の間、音声言語を使ってきました。その中で発達し蓄積されてきた機能だと思います。文字言語というのは、たかだか数千年とか1万年に満たない歴史しかない。現在のテクノロジー、コンピュータや情報社会というようものも、文字言語の延長線上に出てきたものです。だからまだ出来立てで、不安定だと思います。

それに対して音声言語というのは、それ以前にもものすごく長い蓄積があつて、そこで生物進化と同じようなことが起こってきたと思うんですよ。詩的な逸脱は、言語の進化の過程で生き残ってきた、極めて優れた機能だと思います。言語の働きの中で一番うまくいったもの、いちばん大事な機能が、私たちの脳と一緒に進化してきた。だから、それをたかだか数千年の歴史しかない文字言語の合理的思考で封殺するのは、言語そのものの自殺です。抽象的なことに聞こえるかもしれないけど、たとえば小学校の国語を論理的思考とコミュニケーションに限定して、文学的な要素を減らすというような教育方針が間違っているのは、そういう理由からなのです。

発言者C エラーとか言い表せないことみたいなことについてなんですけど、何か神秘化されている謎を最初に想定して言い表せないっていう時と、自明的なものにぶつかって言い表せないっていう時があるんじゃないかなと思います。今日ここ来る前にサイゼリア行ったら、何かめっちゃめっちゃ店内が臭くて。「あの、なんでこんな臭いんですか？」って聞こうと思ったんですけど、それを聞いちゃうと皮肉や批判みたいに聞こえるので聞けなかったんです。僕はただ、単になんてこんなに臭いのかということを知りたい、ただそれだけ文字通りに受け取ってくれて何回説明しても、やっぱり皮肉に聞こえちゃう。

神秘化されてる謎を最初に想定している場合、自分が今正しく言っていない、間違っているっていうのを同時期的に分かっているじゃないんですか。でも、後者の場合は「なんでこんな臭いんですか」というのは、文字通りそのまま正しくて、間違ってるっていうのは他人に発見されるっていうか、後から発見されるみたいな……。同時期的に発見されるか後から発見されるかみたいな違いがあるんじゃないかなと思ったんですけど、何かその辺について……。別に神秘的なものを考えなくても、エラーとか言語それ自体とかについて考えられないのか、って思いました。

吉岡 ありがとう。全部は分からなかったんですけどもお答えします。「神秘的なもの」というのは、今日のトピックとして前面には出なかったんですが、さっき最初の発言者の方が「神秘的なもの」という話題を出して関係付けてくれたわけです。今のご発言の後半の部分に関しては、その通りだと思います。つまり「神秘的なもの」というのは強い言葉だし、そこから出発しなくても、言語のエラーについて語ることは可能です。神秘ではなく、自明なものが一番謎であるというところはあるんですよね。私たちがいちばん当たり前として前提していることが、最も分かっていないんですよね。

精神分析でも、最大の謎は自我なんです。心の奥底にある無意識じゃなくて。最も神秘的なものは自我。それはいちばん我々に近すぎて、だから分からないもの。その意味では「神秘」つてのは確かにイメージとしては、遙か彼方の深い場所に隠されているというイメージがあるかもしれないんですが、必ずしもそれにとられる必要はない、というのはその通りだと思いました。

それにしてもサイゼリヤのお店が臭いというのは、どういう状況なのか……。そしてその理由を聞きにくいというのは……。

発言者C 僕が聞こうとしても、ただの皮肉に聞こえるなと思ってやめた。

吉岡 気にしてもらえないという意味？

発言者C クレームに聞こえる。

安藤 エラーというのが受け手によって逆に起こってくるようなこと。言葉を二重に捉えていたり、片方がそのまま捉えていて、片方はそれを皮肉として捉えて、この解釈の違いによってエラーというのが結構増幅するということかな？

吉岡 それはあると思います。なかなか難しいですね。実際、食べ物屋に入って、確かに言いつらいことかもしれない。

昔、ラーメン屋さんに入って食べてたら、ちょっと辛いなって思ったんですが、僕は言えなかったんです。そしたら横で食べていたおじさんがカウンターの人に「兄ちゃん、このラーメン辛すぎる」と言ったの。すると店のお兄さんが「うちは辛口ですから」とごまかした。ところが横のおじさんは、「これは辛口とか、そんなレベルの辛さじゃない。たんにクソ辛い」と言うと、店のお兄さん黙ってしまったんですよ。それで気まずい雰囲気になって、しばらくしたらそのおじさんが「あのな、これ文句言うてるみたいやけど、こんなこと言う客を大事にせなあかんのやで。京都で商売する時は、京都のお客さんは普通、ちょっと辛いと思っても、何にも言わんと黙ってお金払って帰って、二度と来えへんのやから」と。こういう人がいると、今のエラーというものがちゃんと展開されていく。僕は自分が、その人の言う「何も言わないで二度と来ない客」だと思ったから、展開する力がなかったなと反省しました(笑)。

発言者D お話ありがとうございます。他の動物と人間って生活が全然違うと思うんですけども、その根っこのところに言葉っていうのが大きく作用してると思うんですが、一方で人間ってちょっと本能を見失いがちみたいな印象を持ってるんです。動物と違って本能を発揮しにくい人間の状態に言葉が何か関係があるのかと思うことがあるんですけども、そのあたりを教えていただけますか？

吉岡 言葉と本能の関係ということですか？

発言者D そうです。今、他の生き物と違って、人間が言葉を使うことによって、洋服着ているとか、お金を使う文明が発達してきていると思うんですけど、もう一方で他の生き物と比べた時に人間って本能を見失いがちというか、なかなか本能をつかめる人が少ないような印象があるん



ですが、そこに何か関係があるんじゃないかなと思うんです。その辺についてお考えをお伺いできますでしょうか？

吉岡 それは関係あると思います。その関係をどういうふう理解するかということについては、幾つか可能性があると思うんですよ。言葉があるが故に本能を見失いがちという言い方もできるけれども、人間はなぜかある理由で本能が不完全になってしまったがゆえに、生きていくことが難しくなって、その弱点を補うために言葉を生み出したとも考えられるんですよ。

精神分析ってわりとその立場に近いと思うし、一時期すごく読まれた岸田秀さんははっきりそう言っていましたね。人間は本能が壊れた動物だから、その壊れた本能の欠損、欠如を補うために文明があるんだと。だから文明ってのは、人間が他の生き物よりも優れているから生み出したんじゃないくて、むしろ本能を持っている動物よりも劣っているから、その劣っている部分を無理やりつぎはぎしようとした。その無理やりのつぎはぎが文明で、だから文明は不安定なんだという理解です。

動物たちは何が起ころうとも本能のままに生きていて、それで全然困ってないのに、人間はことあるごとに「どうしよう」と思いながら生きている。それから、「本能」という言葉が出たからついでに言うと、この言葉もさっきの「革命」とか「進化」という言葉と同じように、その本来の意味と多くの人が理解している意味とが正反対くらいに違うんですよ。

よく「本能のままに生きてはいけない」みたいなことを言う。それでは動物と同じだと。でもそれは動物のことも分かっていないし、人間を中心にしている考え方です。本能のままに生きるというのは、欲望を果てしなく追求するというような意味だと思いますが、冷静に見渡してみたら、そんなことをしている動物はいません。動物の本能というのは、環境に適応するように進化してきたのですから、自分を破滅させるような暴走はしません。なぜしないかという、動物はそうしたことを控える自制心があるからじゃなくて、しないものが生き残ってきたからなんです。欲望の追求や攻撃性にも、それが必要な範囲を越えたらロックがかかる。人間というのは、どこかそのロックが解除されてしまっているところがあるんですね。

だから、人間が自分自身について考える「本能」というのは、実は動物の本能じゃなくて、人間自身の壊れてしまった本能なんです。本能に従うことを「動物的」と人間は見下すように言いますが、制御の壊れた本能に翻弄されているのは人間自身です。そのために仕方なく理性が必要になり、文明が必要になるのです。動物は本能を持つがゆえに人間よりも安定性を持っていて、それに対して人間は本能が壊れたがゆえに、それを言語で保証せざるを得ないのだと思います。

本能にロックをかける必要はなく、本能にはロックが最初からプログラムされています。前にどこかの授業で「本能のままに生きればいいんだよね、本当は」と言ったら、「えっ、本当に良いんですか?」「先生、ロックですね」と言われた(笑)。この「ロック」は鍵ではなくロックンロールのことですが、やはり多く人は本能は盲目的な衝動みたいなもので、理性で制御すべきものだと思っている。暴走する衝動は人間しか持たないもので、本能じゃないです。本能のままに生きるというのは、人間にはなかなかできません。本能は抑えるべきものでもないし、そもそも非常に複雑なメカニズムなので人間ごときの知性で操作できるものじゃないという感じがします。

安藤 室井さんが研究会に呼んできた栗本慎一郎とかも……。

吉岡 確かにこれに近いことをおっしゃっていましたね。栗本慎一郎という名前を出して「ああ、あの人」という顔した人は、ある年代以上の人かな(笑)。今の若い人は聞いたことのない名前

かもしれません。栗本さんは室井さんも僕も、直接交流もあった思想家で、経済人類学者です。ハンガリー人のカール・ポランニーという人の思想を紹介しました。経済人類学というのは、近代的な貨幣経済をモデルにする普通の経済学ではなく、経済活動を人類文明に埋め込まれた全体として考えるもので、広い意味で哲学と言っていいものだと思います。僕はジョルジュ・バタイユにも関心を持っていて、ポランニーについては栗本さんの著作から学んだ。しかしバタイユやポランニー、そして栗本さんもそうですが、こうしたスケールの大きな思想家は今の大学とか学界の専門化された世界では、かなり居づらい存在だと思います。

栗本さんは単に学者としてだけじゃなく、一時期テレビとかよく出てたし、朝まで議論する番組とか、それから国会議員にもなったしね。その時代ですら本当に型破りな思想家だったんです。著作では『パンツをはいたサル』っていうカッパ・サイエンスから出た本がすごく話題になりました。その後『パンツを捨てるサル』というのも書いた。パンツをはいたサルとは人間のことで、パンツとは文明のことなだけで、パンツをはいたがゆえにフロイトの言う「文化の中の居心地悪さ」、つまり人間であることの基本的な「生きづらさ」が生まれた。だから「パンツを捨てる」というのはさっき言ったような意味での「本能に戻れ」みたいなことでもあるんですね。ある意味不可能なこと。

でもこういうことを小難しくインテリっぽく言うのではなくて、誤解されるのを覚悟であえて言うこと自体が、パンツを捨てようとするアクションでもあり、その点をぼくはとても尊敬していたんです。

発言者E 猫って野良猫同士では鳴かないらしいんですよ。ミャーミャー泣くのは飼い猫だったり、地域猫としてこの人間から餌をもらったりする猫らしいっていう話を枕に持ちつつ、なんでこの話をするかと言うと、人間の鳴き声、言語の起こりはなんだろうみたいな繋がりなんです。猫はそのネット上の言説が本当だったら、猫同士では別に鳴かなくて良かった、人間に何か要求したりとかで、ミャーというようになった。人間の言葉の方もそういうものじゃないのか的な話があり得るっていうのを置いておいて、その猫がミャーって言い出したものの発展形が先のラーメン屋のおじさんかなと思ったんです。

つまり、京都スタイルが何か知らないんですけど、それでいくとお金だけ払って出て二度と来ないっていうので良かったわけで、それは人間社会ではそれでもうまく成り立ってるわけです。でも、それに対しておじさんは何か変えようと思ったか、何かしらのことがあってミャーと言ったわけです。この話って何かリチャード・ローティがどうこうみたいなことでおっしゃっていた自然の鏡としての言語じゃなくて、ローティだったら文学表現とか言っちゃうんですけど、言語の役割としてちゃやうやつがあるんじゃないのっていう文脈で猫のミャーだったり、おじさんの「ラーメン辛いぞ」があると思うんです。ってことで、そういうような新しい創発的な言語の使い方の面白いエピソードとか、もう1個ぐらいあったら教えてほしいです。

吉岡 いや、もう一個のエピソードとしたら今の発言がそうじゃない？ さっきまでの話を猫のミャーに結びつけたということが、ある種創発的なことかもしれない。でもそれは、僕はちょっと疑う。飼い猫になって人間に飼われたからミャーと言うようになった、野生状態の猫同士は鳴かないというのはちょっとおかしい。何故かと言うと、人間に飼われる以前から猫は進化の過程でミャーと鳴く能力を獲得しているんだから、使っていたに決まっているという感じがする。

ただ今この話題の展開が面白いと思うのは、前に一回この講座に来てくれた人で、京大の野生動物研究センターのドクターで飼い猫の研究をしている人がいて、話を聞いたらすごく面白かつ

た。飼い猫の研究って全然進んでいないんだってね。野生動物の研究に比べて。野生動物研究センターで飼い猫の研究をしているというから、「えっ、飼い猫って野生動物なんですか?」と聞いたら「半野生」という定義だそうですね。

20、30年前だったら飼い猫の研究しても論文として認めてもらえなかったし、誰もしなかったのが、最近になってその面白さが認められるようになった。その面白いことの一つは、今言ってくれたような、人間と一緒にいるという環境でしか発現しない猫の行動ってあるらしいんですよ。

ペットの中でも犬というのは人間と一緒にいた歴史が長い。犬派と猫派の分かれ目というのは、猫派の人は猫の「半野生」的ところが好きなのだと思います。そこからすると犬は人間になつきすぎて、ほとんど人間なんだよね。猫はすぐ近くにいながら勝手にしているみたいなの。それでも人間との共生には影響を受けていながら、犬のようにはなつかない。いかにして人間の近くで幸せに生きるかということと戦ってきたわけです。だから、人間を利用するというか手玉に取っているようなところがある。

本当に猫の好きな人たちって、飼い主のことを「下僕」と呼ぶよね。つまり猫のために生きている人間なんです。これはある意味正しいかもしれない。私たち人間が猫を飼ってやっていると思っただけで、実は猫の世界からみれば「人間もだいぶうまく操作できるようになったな、よし」みたいな感じだと思うよ。

あとさっきのラーメン屋とのつながりで、野生の猫が京都人というのは今後の検討課題だな。

発言者F 一番最初の質問の答えにも繋がるかと思うんですけど、私は理系の大学生をやってみて、完全に宗教とか神秘的なものとか科学を分けるっていう土壌ができてるんですよ。宗教の話とか、そういう神秘的な話をするのは恥だみたいな文化があるんですけど、そういう大学生の話とか聞いてたら、最終的に至った結論が仏教の解脱みたいなことを言い出しまして。科学的な思考を積み重ねて、論理的に考えた末の帰着は、それっていうのが面白くなって思いました…。

それで質問なんですけど、私としては、そういう大先輩の書いた文章とかを彼らに紹介してそっちを勉強してもらおうべきなのか、それとも彼らは迷うままに任せた方がいいのかっていうのを伺いたかったのですが。

吉岡 迷うままに任せた方がいいと思います。

発言者G すいません、先の栗本慎一郎さんの話になって、ほとんど吉岡先生のお話を伺っているんで、亡き室井先生の思い出話として、私帝塚山学院大学の室井ゼミの二期生なんです。私たちが卒業すると同時に先生は、横浜に移られたので、室井先生の思い出として……。

三回生の私たちの講読が『パンツをはいたサル』だったんです。それで当時、室井先生が栗本先生を大学に呼んでいらっしやっすごく緊張してお迎えされたんです。「僕、昨日ちょっとお腹壊して何も食べてないから学食に行ってカレー買って来い」って言ってパシリに使われた記憶があるんですけど、すごく強そうに見えて先生は結構、繊細でいらしてピリピリされてたのを覚えているのと、帝塚山学院での先生のご活躍は短かったので、どういう教育をされていたかが多分皆さん御存じないと思うんですけども、三回生のゼミでいきなり『パンツをはいたサル』買って来い」って言われて、みんなで真剣にそれを勉強したっていう記憶がありましたので、皆様にお伝えしたいなと思いました。ありがとうございます。

吉岡 室井さんが帝塚山学院大学に栗本慎一郎さんを呼んだ時、ぼくも一緒に聞いていたんです。

その後の懇親会も一緒に行ったんですけれども、確かに今おっしゃったように、栗本さんはその頃メディアの露出がすごく多かったので、テレビに出て論争しているようなイメージでみんな見ていたので、怖い人かなという印象もあったんですけれども、実際に会ってみるとものすごく優しくデリケートな人ですね。

そういうことってよくあるんです。有名人と会うと、メディアに出ている時のイメージと逆の場合が多いんですよ。芸能人とかでも対面で会うと、こんな人がよくあんなパフォーマンスができるなというような場合が多いよね。これもやはり何か補償的な関係というか、普段こんなおとなしいからステージの上で爆発するみたいな……。

さっき発言者6の方のご質問に対して「放っておいた方がいい」とぼくは答えましたが、それは何故かという、人間が変化するためには、自分の中でその変化の方向にロジックが発展してたまっていないとダメだと思うんですよ。いきなり正しいことをぶつけられても変化しない。お前が悩んでいる問題に関してこんないいことを言っている人がいるよと、ただ知識としてこれを読めみたいに本を渡しても、大抵の場合は分からないんです。どうしてそれが解決なのかが分からないと思います。分かるためには、自分の中で問題が進展して、あと一押しみたいところまで行ってないといけないというか……。病気があるステージまで行ってないと薬が効かないみたいなきっかけだと思ふ。

子供の教育でも、あまり初期段階からいいもの、役に立つもを与えておけばいいというものではないと思う。成長というのは単純な過程じゃないのです。ある程度放っておいて子供の中で自然に変化し発展するのを待つのが必要です。昔は子供が多かったので結果的に放っておかれたけど、今は少子化なので親の注意が少数の子供に集中して、放っておくことが難しいということもありますが、子供を放っておけない人というのは、人間の持っている自分で発展していく力というものを信じてないんですよ。だから引っ張り上げなきゃいけないと思っている。

これは健康についての考え方に関しても同じだと思います。身体は自分で健康を維持する力を持っているのだから、それが発揮できる生活をするのが基本的です。病気になっても身体は自分で治る力を持っているんだから、少々のことなら薬飲んだり注射打ったりしなくてもいい。それだけではどうしてもダメという時だけ病院の治療を受ければいいと思うのに、今はちょっと不調があればすぐに何らかの治療をしようします。その結果、身体のプロセスに介入して自然に治癒する力を阻害してしまう。治療をし過ぎてかえって病気になっているという状況だと思います。

それと同じように、悩んでる人にすぐに答えを教えるのではなくて、まあ好きなだけ悩みなさいって言うておいた方がいいんじゃないかな。これはこの哲学講座のテーマ「考えるとは迷子になること」にも通じるものだと思います。

安藤 まだ質問があると思うんですけれども、時間になりましたので今回はこれで終了とします。次回は12月23日で、テーマは「プロジェクト（投一企）としての生」です。また是非おいでください。ありがとうございました。（拍手）

2023年11月18日（土） 於：京都芸術センター「大広間」